

延文二年墨書銘のある木造聖観音菩薩坐像と像内納入品

内田 啓 一

はじめに

日本彫刻史では南北朝時代から室町時代にかけての作例についても論考が重ねられつつある⁽¹⁾。主に、畿内を中心として造像活動を展開させた康俊・康成についてまとめられた田辺三郎助氏の論考⁽²⁾や、南都で発展した仏所に関するもの、院派や円派の畿内及び東国での造像活動とその作例についてである。また、最近では清水善三氏によって鎌倉十四世紀以降の形式分類が試みられている⁽³⁾。このなか、東国の院派については清水真澄氏の一連の論考があり⁽⁴⁾、その他の東国仏師の個々の活動と作例については北口英雄氏や林宏一氏⁽⁶⁾、若林繁氏⁽⁷⁾らによる調査と論考があり⁽⁸⁾、それぞれの位置づけが行われている。

本稿で取り上げる聖観音菩薩坐像(図①)は東国で南北



図① 木造聖観音菩薩坐像

朝時代に制作された一作例にすぎないが、本像を特色づけることとして像内に年紀があり、それに加えて八種もの像内納入品が確認される点がある。また、像内の墨書によつ

て延文二年（一三五七）の制作年が明確であり、多彩な納入品によって像の造立背景を多少なりとも浮かび上がらせることができると思われる。本稿ではこの聖観音菩薩坐像について紹介しながら南北朝時代の東国の作例としての位置づけと納入品にある意味を問うてみたい。また、それによって本像造立の思想背景についても考えてみようと思う。はじめ像内納入品のひとつに印仏があることから本像に興味を持ったものだが、⁽⁹⁾その他の像内納入品の特色を考えていくうちに、本像そのものについても考察し、全体を考えるようになった次第である。

第一章 木造聖観音菩薩坐像

一 形状と法量

現在、個人蔵となっている本像であるが、東京都内の都心に近い寺院から流出し、某古美術商の手に渡り、そこで像内納入品が見いだされたという。その折り、現所蔵者も納入品の確認に同席しており、後に現在の所蔵者の所有するものとなった。したがって、本像が東京の寺院にあったことと、納入品が本像に帰属するものであることは確実と

考えてよからう。

本像は右手を胸前にして掌を内側に向け、左手は腹前に置き、中をあけて拳を作る。これは蓮華を持していたことと思われるが、現在は失われている。高髻を結って、ややうつむき加減の顔であり、印相や髻から本像が聖観音像であることが解る。頭髮は細線を刻んであらわされ、高髻も均一な刻線によってあらわされる。厚手の衣を通肩にまとい、やや長い袖を垂らす、いわゆる宋風の服制である。肩衣を懸ける。また、⁽¹⁰⁾膝前には前掛けのように衣が垂れた前垂れがあらわされている。肩はなで肩で張りもなく全体的にも丸味を帯びており、柔和な感を与える。

顔は鼻梁線の通った鼻高で、眼は切れ長にあらわされ、口は小鼻の幅とほぼ一緒にまわっている。頬はそれほど丸いものではなく、顎で引き締まっており、額の広さと相まって端正な顔立ちである。

首は細く長く、また、衣の襟が厚く表されているので、より一層首が長くみえる。側面から見るとそれは一層顕著である。衣文線等は複雑で細かい仕様はみられず、むしろ大振りなものであり、彫りは深い。形式的には東福寺永明院蔵の釈迦如来坐像に近い。その衣襷を簡略にした感があ

る。

次に彩色であるが、現状ではおおそすべての彩色が除去され、木肌が出ている。だが、子細に観察すると頭髮に群青、衣や体部には金箔の残片が認められるので、一時は頭髮群青で、悉皆金色の聖観音菩薩坐像であったと思われる。しかし、それも当初のものではあるまい。

さて、法量は次の通りである。

総高	四一・五	頂ノ顎	二〇・〇	面長	八・〇
面幅	七・〇	耳張	八・八	面奥	八・八
胸奥	九・〇	腹奥	一〇・〇	肩張	二〇・二
臂張	二〇・八	像奥(欠裳)	一三・一		
膝張	三〇・〇	膝高(左)	六・八	(右)	七・一
膝奥	二〇・三				

総高は高髻がある分だけ右の法量となるが、それを差し引くとそれほど大きな像ではない。

二 構造及び像内墨書

図版でも解るように、現在、一部を除いて矧ぎ目はほとんどはずれており、構造は良く解るようになっていいる(図②)。体部は両肩で、前後に矧ぎ、頭部も耳の後ろで前後



図② 解体図

に矧ぎ、胸は頭部前材と共材。その頭部及び胸は着衣の襟にそって挿し込む。また、膝の後ろでも矧ぐ。左右手は手首で挿し、左手小指欠、また、裳先も欠。右肩の肩先は左肩に比べてやや大作りで、部材も異なるので後補である。また、左肩先も後補で、更に衣袖の両一部も後補。そのほか、像底の一部に後補が認められる。眼は玉眼嵌入。台座

は失われてない。後補が多く、欠失も認められ当初の姿を
やや損ねているのが惜しまれるが、先述のように注目すべ
き点として、体前面内側に次のような墨書銘がある(図③)。

胸内剝部墨書銘

造立聖観音一尊

工師治部法考源昌(花押)

延文第二_丁十一月十二日



図③ 胸内剝部墨書

これによって、延文二年(一三五七)十一月十二日の制
作年月日と本像がまぎれもなく聖観音像であること、そし
て工師治部法考源昌なる仏師による造立であることが解る。

源昌には「工師治部法考」という自称としての「工師」、
そして官職としての「治部」、補任としての「法考」があ
り、仏師の自称肩書き表記としては通例とやや異なるよう

に思えるので、ここでは他の作例より類似する呼称をみて
みよう。

「工師」は音から考えて、運慶に用いられたような「巧
師」⁽¹¹⁾の系列語句であると思われるが、他に類例がない。通
常、ここには「仏師」との文字が記されるので、同義と解
釈しておきたい。

次いで、仏師で「治部」を用いる例として以下のような
作例がある。⁽¹³⁾

福島県・西光寺蔵で乗円が手がけた、応安四年(一三七

一)の阿弥陀如来坐像がある。像内背面墨書には⁽¹⁴⁾

応安辛亥十二月 日

大檀那田口村西光寺

大仏師治部法橋乗円

とあり、乗円は「大仏師治部法橋」と称している。同じく
西光寺の応安七年(一三七四)の地藏菩薩坐像像内墨書に
は

大たんなん たくち西光寺 応安七年

八月二十八日

仏しんちふほきう乗円

とあり、前記阿弥陀如来坐像の造立わずか三年後の作例で、

「仏しんちふほきう乗円」と平仮名で記しているが、「仏師治部法橋乗円」の意となる。次いでやや時代は下るが、正長二年（一四二九）の滋賀県・西明寺の院尋作木造二天像の像内納入貼板墨書には

大仏師法印院尋作者備後公禪勲丹後公梁円石見公禪及治部公全空

とあり、大仏師法印院尋の下にいた仏師が四名記されており、全空なる仏師に「治部公」との官職名が認められる。また、この墨書の順序から考えて、「備後公」「丹後公」「石見公」などの地名官職が上位であり、その下に治部公があることもわかる。

次に「法考」は「法橋」のことであると思われるが、再び乗円の作例で、応安四年（一三七二）の福島・陽泉寺の木造釈迦如来坐像の像内背面墨書に

大仏師大夫法眼円勝

同 法教 乗円

応安年六月八日誌

とあり、「法教」とある。西光寺でみた乗円であるが、前述の西光寺の墨書銘のように仮名で記される「ほきう」は漢字となると「法教」とも記され、通例の「法橋」以外に

様々な用例があることが理解される。乗円は福島県下を中心に十四世紀中頃の活動が知られている円派の仏師である。同一の仏師でも自称が異なるようである。

次いで源昌のように「源」の字が付く仏師を求めてみると市原市・多聞寺の聖観音菩薩坐像が南北朝の作例で、源覚であり、同じく市原市・自性院の薬師如来立像が室町時代の作例で、源祐である。⁽¹⁵⁾この二例だけで「源」の流派があるとは考えがたいが、とはいえ源昌の造像技法は正統的であり、留意しておかなければならない。⁽¹⁶⁾

以上のように考えると、本像の仏師である「工師治部法考源昌」も類例を求めることができる自称であり、本像の伝統的な構造からもまったくの俗人仏師ではなく、いずれかの仏師の系譜につらなるものと考えられる。

第二章 像内納入品

本像の大きな特色である像内納入品⁽¹⁷⁾であるが、それらは前述のように八種類認められる。舍利、金銅仏、印仏、染織品などで、詳細は以下の通りで、順に記す。

① 蓮実舍利容器及び舍利 (図④)

舍利容器 一・六 直径 一・〇

蓮の実の上方を切つて中を剝り、彫刻した蓋を押さえた容器である。中に舍利が七粒納入されている。⁽¹⁸⁾ 舍利納入は像内納入品の中に仏像の魂という意味でしばしばみられるが、蓮の実を容器として用いた例は珍しい。蓮実型の舍利容器は正安四年(一三〇二)に叡尊の十三回忌追善のために造立された西大寺蔵木造文殊菩薩騎獅像納入品に二・一センチの作例がみられ(図⑤)、同趣のものとして留意⁽¹⁹⁾される。なお、西大寺蔵の場合は錦裂に包まれていたとい⁽²⁰⁾。

また、その他、小型の舍利容器としては竜吟庵蔵大明国師像の舍利壺が二・七センチで小型であり、長谷寺の難陀龍王像の舍利容器(竹製)が一・四センチとやはり小型であり、本体像の法量の大小にかかわらず、舍利納入に関しては小型舍利容器の事例は多く、まして本像のように小型な観音菩薩の場合ではなおさらであろう。ただ、やはり蓮実を用いた事例はなく、ここでは 蓮実型として西大寺文殊菩薩像納入品の舍利容器には注目しておきたい。⁽²⁰⁾

② 如来形金銅仏 一 軀 (図⑥)

総高 五・七 像高 五・一 光背 六・五
全体(台座から光背先) 七・九

施無畏、与願印で通肩、蓮台に立ち、蓮弁形の光背を背負った如来形で、釈迦如来立像と思われる。俗に胎内仏と称されるものであるが、鎌倉時代、南北朝時代の納入仏を見る限りでは木彫仏が多く、金銅仏は珍しい。⁽²¹⁾ 像容から判断して、これも本像と同じく南北朝時代の作と見て大過あるまい。光背をしっかりと有している点でも貴重であり、像内納入品ということから光背を失うことなく保存されたのであろう。像内納入仏としても、また、南北朝時代の金銅仏としても貴重な作例であろう。

なお、聖観音像像内には背面内剝り腰の辺りに幅三・〇、奥行き二・五センチで棚状に小さく細工されている箇所があり、この如来形金銅仏の台座底辺が丁度納まるようになっており、そこにしっかりと安置されていたものと思われる。

③ 天部形印仏 一 紙 (図⑦)

楮紙 紙 一六・〇×八・四 像 八・〇×六・五

「鸞干」刻書

兜を被り璫璫衣で、岩座に腰掛け、右足を曲げて左足を伸ばしたゆつたりとしたポーズで、右手を額に当ててかざし見、右手には剣を持す天部形印仏である。

右手をかざす天部形には鞍馬毘沙門天があるが、鞍馬毘沙門は立像であり、本図のように岩座に坐す姿ではない。本図を毘沙門天像とすると観音菩薩像に毘沙門天像が納入される事例は興福寺蔵で旧食堂本尊とされる千手観音菩薩像納入品で安貞二年（一二三八）の毘沙門天印仏があり、逆に毘沙門天像に観音菩薩印仏が納入される作例は奈良・長泉寺蔵で平安時代末期の制作と考えられる木造毘沙門天立像納入品の十一面観音菩薩摺仏がある。これらは法華経の三十三観音応現の思想から納入されたと考えられるものであり、⁽²²⁾観音菩薩と毘沙門天には教義的に必然性がある。本像は聖観音像であることを鑑みるとこの印仏も毘沙門天像と判じても良さそうに思われるが、毘沙門天像と決定するにはその類型に欠ける。

一方、天部形で手を額にかざす像に禪宗で総門などに祀られる大権現像や神像で大將軍神像⁽²³⁾がある。とはいえ、左右手の持物にも問題があり、また、聖観音像に納入される積極的な理由もない。毘沙門天であっても鞍馬毘沙門が聖

観音に納入されるという明確な理由もない。したがって、ここでは尊名比定を残念ながら保留としておく。⁽²⁴⁾いずれにせよ、貴重な作例として看過できない。

また、右上の「鸞干」についても何を示すものか不明。名称としての鸞干は考えにくく、種子とすると毘沙門天の種子は「バイ」である。「ランカン」とすると、「アンバンランカンキャン」の五大真言の一部とも思えるが、それでも意味不明。御教示願いたい。

④ 結縁交名残片

(図⑧)

結縁交名は残念ながら断片となってしまうっており、諱や僧名などをまったく確認することができない。また、これだけでは造立の際の結縁交名であるのか、過去者供養のために結縁交名であるのかも判じにくい。しかし、わずかながら確認できる文字に「尼」「明」「笠」「大徳」「和／徳」「大禪」などがある。その中で興味深いのは「大徳」である。

大徳は本来、徳行ある僧侶に対する尊称であるが、元応元年（一二一九）の法金剛院蔵木造十一面観音菩薩像内納入品にみられる結縁交名⁽²⁵⁾などで確認すると明らかのように、

特に律宗で用いられた高僧に対する呼称である。⁽²⁶⁾その他、西大寺流の作例では暦応三年（一三四〇）の福岡・大興禪寺の木造如意輪観音坐像の像内背部墨書にみられる「大願主当寺長老玄海大徳」⁽²⁷⁾や応安七年（一三七四）の個人蔵不動明王坐像の両脚部刳面墨書にある「比丘宗賢大徳」などがある。⁽²⁸⁾本像に關係した結縁交名の中に律僧と思われる呼称が見られることは留意されよう。これをもって直ちに西大寺流や唐招提寺關係の律僧と結びつけるわけにはいかないが、後述するように本像の成立を考える上で律僧については見過ごせない点である。

⑤ 小団扇残闕 一面（一片）

十一・七×十一・四 柄 二・〇 （図⑨）

中央に「□風東西南北無滅」

左に 「波□□」

右に 「海中人□」

大きさからみてもこれはミニチュア団扇であり、実用品が納められたものではない。扇の納入事例は認められるが、⁽²⁹⁾団扇の納入事例も珍しいものであろう。中央に「□風東西南北□」と墨書がある。頭の文字は「さんずい」と思われ、

とすれば法風であろうか。法風が東西南北の四方に通るという思想は中国・唐代の仏教思想の中にしばしば見られるので、仏教が世の中に通るようにそれを団扇の風に乗るとの意図があるものと思われる。しかし、「波□□」「海中人□」は意味不明である。団扇に関する語句であるのか、それとも海に關係する結縁者のもので、実際の語句であるのか判じかねる。

この団扇には放射状の線があり、骨の跡と認められるので、一時は完成品としてあったものと思われる。骨の一部と思われる竹片も残存する。料紙には銀が刷かれており、もとは美麗な裝飾小団扇であったと想像される。

⑥ 紙片 一片 十五・七×五・五 （図⑩）

銀刷、使途不明

円形の周辺を切り取った三日月型の紙片。紙質は前記小団扇とは同じで、切断の余りかとも思われるが、曲面は一致せず、こちらがやや大きい。まったくの残片なのか、それともこれをもって使用されるものか、納入意図なども不明。だが、雲母がはかれており、美術工芸品の一片であることは間違いない。

⑦ 小袈裟 一領 十条袈裟、

十六・一×七・三(十四・五×七・〇) (図⑪)

紐 七・八 木軸 一・三

墨染めの糸で織られた無文単衣で、小型の十条袈裟である。袈裟留めの紐も制作されており、通常用いられる袈裟の完全なミニチュアとして制作されたものである。

袈裟を納入する事例は広島・安国寺蔵善光寺式阿弥陀三尊像の納入品である袈裟(一二七、〇×五九、〇センチ)で通常の大きさの袈裟を納入しているのに対し、小袈裟では神奈川・浄光寺蔵阿弥陀如来像の納入品が袈裟残闕であり、愛媛・保国寺の伝仏通禪師納入品⁽³⁰⁾にあり、また、三重・万寿寺蔵地藏菩薩像の納入品の中には二、七×一〇、六センチと七、三×二四、五センチのまさに小袈裟が二点も納入されている。小袈裟納入の思想的背景は明らかにしえない。しかし、ひとつ考えられることは師から弟子への法脈相承の意味があるものと思われ、中世仏教全般にみられる師資相承の風潮の一端を窺わせるものであろう。

また、もうひとつ考えられることは袈裟供養などにも見られるように僧侶の徳を偲ぶ場合、袈裟はその象徴であり、

何か由縁のある代用としての納入も考えられる。この点については改めて考えねばならない。

⑧ 錦裂残闕 一片 十一・五×九・五 (図⑨)

茶・薄茶・緑の三色、楮紙による裏打ちらしきものあり。

何故、裂の断片を納入するのかについては明らかにできないが、錦裂を納入する事例はきわめて多い。神奈川・浄光寺の阿弥陀如来像には袈裟残闕があり、京都・龍吟庵の大明国師像には錦袋が納められていた。また、ここで注目されるのは奈良・西大寺の諸例に錦が多くみられることで、釈迦如来立像には父母遺骨錦裂(図⑬)、愛染明王像に錦裂(図⑭)、興正菩薩像も錦裂が、そして文殊菩薩騎獅像には先述のように錦裂が認められる⁽³¹⁾。これは西大寺流の納入品の特色と考えるとよからう。また、奈良・長谷寺の難陀龍王像にも錦袋が納められ、三重・万寿寺の地藏菩薩像にも錦袋がみられる。

これらを見ると、錦袋を何らかの理由によって納入する事例は多い。これらの多くは舍利包みであり、その他遺骨包みである。その意からしても、また、西大寺の蓮実型舍利容器にも包みとして錦裂があるので、①の蓮実舍利容器



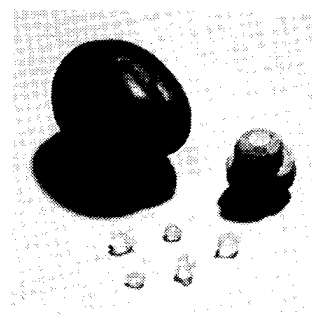
図⑦天部形印仏



図⑥如来形金銅仏



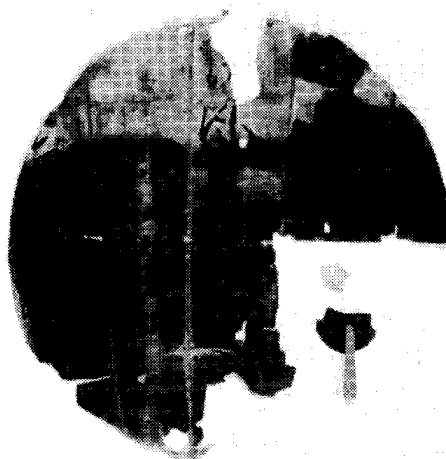
図⑤蓮実舍利容器
西大寺蔵木造文
殊菩薩騎獅像納
入品



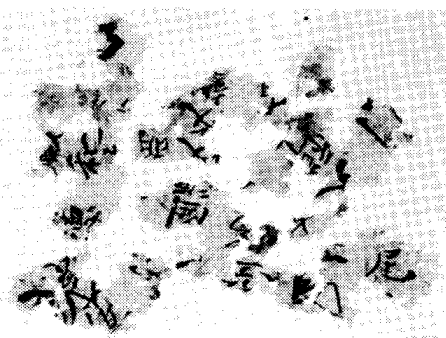
図④蓮実舍利容器
及び舍利



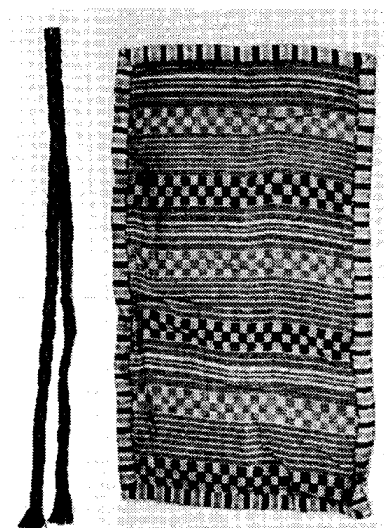
図⑩紙片



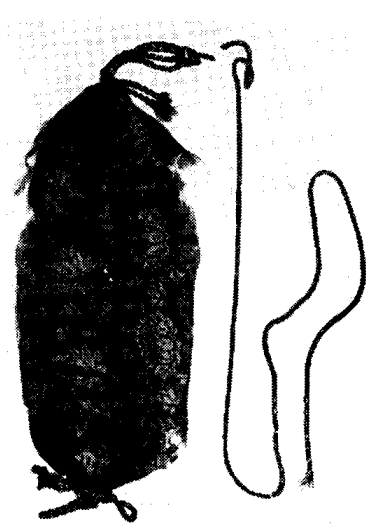
図⑨小団扇残闕



図⑧結縁交名



図⑭錦裂 西大寺蔵木造
愛染明王像納入品



図⑬錦裂 西大寺蔵木造
釈迦如来立像納入品



図⑪小袈裟



図⑫錦裂残闕

像内納入品事例類似表

No	尊像名	作者	所在地	時代	類似の納入品	その他の納入品及び備考
1	愛染明王坐像	善円	奈良・西大寺	鎌倉時代 宝治元年 (一二四五)	①舍利容器 金・銀製 ②錦包裂 ③錦残闕 〇・九 一・一・二×二〇・〇 五・六×二〇・〇	範恩造立願文、「瑜祇經」、梵字宝篋印陀羅尼經幢、散念誦他
2	釈迦如来立像	(円)善慶	奈良・西大寺	鎌倉時代 建長元年 (一二四九)	①舍利塔 水晶 ②錦袋 ③錦残闕 高三・八 縦二一・〇	清涼寺式 賢任造立願文、結縁交名、梵字真言曼荼羅、法華經他
3	阿弥陀如来立像		広島・安国寺	鎌倉時代 文永十一年 (一二七四)	①袈裟 ②毘沙門天印仏 一二七・〇×五九・〇	善光寺式阿弥陀三尊像 念仏帳
4	難陀龍王像		奈良・長谷寺	鎌倉時代	①舍利容器 竹製 ②錦袋 二口 三・〇×一・七、六・〇×三・八 高一・四	舍利包、法華經、鏡他
5	阿弥陀如来立像		奈良・興善寺	鎌倉時代	①錦袋	源空書状、念仏結縁状
6	阿弥陀如来坐像		神奈川・浄光明寺	鎌倉時代 正安元年頃 (一二四五)	①舍利塔 水晶製 ②舍利塔包 錦袋残闕 ③舍利塔包 錦袋残闕 ④小袈裟残闕 高四・〇 一・一・八×八・八 一・三・〇×一・〇・〇 八・五×二二・〇	木造毘沙門天像、木像阿弥陀如来立像、木造聖観音菩薩仏龕、木造愛染明仏龕、宋版法華經他
7	南無仏太子像		ハーヴァード大学 学サックラー美術館	鎌倉時代	①錦袋	木造毘沙門天像、木像阿弥陀如来立像、木造聖観音菩薩仏龕、木造愛染明仏龕、宋版法華經他
8	大明国師像		京都・龍吟庵	鎌倉時代	①舍利塔 木及び水晶製 ②錦裂 二口 高七・八	無関普門(一二二二、一一九二) ※西大寺本と同版の九重守あり
9	文珠菩薩騎獅像		奈良・西大寺	鎌倉時代 正安三年 (一二三二)	①蓮実舍利容器 ②水晶五輪塔舍利容器 ③錦裂 ④錦裂 長二・一 高四・七 三・三×三・〇 六・一×六・五	観尊十三回忌追善像 ※東福寺と同版の九重守あり 日課文珠図、八字文珠曼荼羅図、木造文珠菩薩像、願文他
10	仏通師像		愛媛県・保国寺	鎌倉時代	①舍利塔 ②小袈裟 ③錦裂 高四・七 一五・三×八・六 四一・五×五・〇	東福寺・痴兀大慧 (一二一九、一二三二) ※宋版法華經(伝香寺本と同版)
11	地藏菩薩坐像	寛慶 忍慶	三重県・万寿寺	南北朝時代	①小袈裟 ②小袈裟 ③錦袋 ④錦裂 ⑤錦裂 二・七×一〇・六 七・三×二四・五 縦七・八 長八・五	両界種子曼荼羅(円成寺南無佛太子納入品と同版)、騎獅文珠印仏、地藏菩薩印仏、仏頂尊勝陀羅尼、寄進状他

を包んでいたかとも想像される。

また、錦裂と共に袈裟や舍利壺も納入されている作例に、京都・龍吟庵像や奈良・長谷寺像、三重・万寿寺像などの事例があり、これらには納入目的としての明確な意味合いがあるものと思われる。

なお、⑦小袈裟、⑧錦裂残闕についての組織・形成については、安藏裕子氏による別稿が予定されているので参照していただきたい。

以上、八種の納入品を数える。さて、本納入品と同類の納入品がある作例を一覧表にしてみた(表1)。その特徴は十三世紀末～十四世紀の他の納入事例のなかで、舍利、袈裟、錦が約束事のようにみられることであり、さらにはそれらが西大寺蔵愛染明王像や釈迦如来像、文殊菩薩像など西大寺関係の納入品事例に類型を求められることである。これは希有な例である蓮実型舍利容器を考えても注目せねばならない。

また、三重・万寿寺や東福寺など西大寺と関連する納入品を認めることができる作例に舍利・小袈裟・錦裂が多く見られることは注目に値しよう。すなわち西大寺を中心とした律宗に関連し、しかも交名にみられる「大徳」からも

律宗に関連するものが多いことは本納入品の特色がそのまま西大寺流の特色と考えてよいのではなからうか。とすれば、本像造立の背景にも西大寺流律宗の存在を想定することも重々考慮せねばなるまい。

第三章 館山市蓮蔵寺蔵の木造釈迦如来坐像

一 作風及び形状と法量

本像とほとんど同一な作風が認められるものに館山市・蓮蔵寺の釈迦如来坐像がある。延文元年(一三五六)の銘があり、造立年からも注目せねばならない作例である。また、大衣の折り返しや前掛けのような腰衣も一致し、ややなで肩の張りやうつむき加減の顔、衣文の処理の仕方も同様である。この作例は悉皆調査の報告書でもある『館山市の仏像―館山市仏像彫刻悉皆調査報告書⁽³³⁾』でいち早く紹介されているもので、筆者も改めて実査したが、本稿の聖観音と技法的にも法量的にも非常に近い作例として注目される。法量は後に記すように像高(除高髻)・膝張・肩張等がほぼ近い大きさである。

右手を胸前で施無畏印とし、左手を膝前に与願印として

結跏趺坐する通例の釈迦如来像である。台座はない。現在では明治時代の補修がなされ、鮮やかな群青色の頭髮に小豆色の衣、金泥による肉身となっており、残念ながら当初の姿を偲ぶことはできない。

肉髻を低く広くとった頭部に、切れ長の眼、また鼻梁線の通った高い鼻とこじんまりした口の顔である。衣は厚手の通肩で膝前には前垂が広がる。丸味のある肩で全体的に柔らかい姿となっている。

法量は次の通り。

総高	三四・〇	頂ノ顎	一二・五	面長	七・五
面幅	六・八	耳張	八・〇	面奥	九・〇
胸奥	一〇・五	腹奥	一一・五	肩張	二〇・二
臂張	二〇・〇	像奥	二五・〇		
膝張	二七・五	膝高(左)	六・八	(右)	六・五
膝奥	二〇・三				

総高こそ聖観音の高髻と釈迦如来の螺髪という形状の違いから異なるが、前記の聖観音像の法量と比較すれば明らかにように肩張や臂張、膝張、膝高などをはじめとして顔や体の法量は同数地といつてよからう。

二 構造及び像内墨書

頭部は耳の後ろで前後に矧ぎ、胸は前材と共木で襟にそって挿し込む。体も肩のところでも前後に矧ぎ、膝前でも矧ぐ。両手首は別材で挿し込む。頭部内に次のような銘文がある。現状では簡単に判読できなかったため前記『館山市の仏像』⁽³⁵⁾によった。

〔後頭部墨書銘〕

延文元年^{丙申}六月吉日

奉造立

これによつて聖観音像造立の前年、延文元年(一二三六)六月の制作が解る。しかし、残念ながら仏師名を確認することはできない。

ついで、正・側・背及び像底のそれぞれ形式を比較してみよう(図15、16、17、18、19、20、21、22)。各図をみれば、ほぼ同一形式であることは明らかである。頭部や手の位置はもちろんのこと衣文の皺や線、右襟をまつすぐ伸ばして左襟は曲線とする襟の表し方、背面の規則正しい波文とする衣皺の曲線までほぼ一致する。右袖の内側が前垂の上に延びる形式や前垂の両側を膝前で一度折り返す形式、また、両膝の皺など随所に類似点を認めることができる。

また、像底についても本像が裳先欠失であることを考慮しても円形の同類型であり、像底からみた前後及び左右の矧ぎも同一工法であり、像底それ自体の矧りもほぼ丸い三角形に刳っている点も同一仏師とみなすことができる。像底は同一仏師の最大の判断基準になるという。⁽³⁶⁾したがって法量、構造、着衣、形式の諸点で一致し、館山・蓮蔵寺蔵の釈迦如来坐像も聖観音菩薩像と同仏師・源昌による造像で、しかも延文元、二年と相次ぐ作例と考えて間違いあるまい。

三 蓮蔵寺とやぐら

では次ぎに蓮蔵寺釈迦像の造立背景を考えてみたい。聖観音菩薩像との共通点として単に延文元年の造立年が近く、同一仏師の手によるものということだけでなく、ここで注目されるのは蓮蔵寺の背後にやぐらが造営されている点である。

やぐらは鎌倉地方を中心にして、主に武士階級によって十三世紀～十五世紀にかけて造営された納骨施設及び仏道、墳墓の一形態として知られている。それは壁面に横穴を掘り、奥に遺骨等を安置し、前面には五輪塔や宝篋印塔、石仏等を配して供養とした形式である。主に鎌倉地方にみら

れるが、隣接する六浦や三浦半島にも広がっており、神奈川県下には際立って多い。⁽³⁷⁾ところが、千葉県内、特に房総半島にもやぐらは存在し、富津市や鋸南町、館山市に多く分布し、⁽³⁸⁾その他、君津市、市原市、鴨川市など広範囲にわたってみられ、東京湾をめぐって六浦や三浦とその対岸である房総との影響が指摘されている。⁽³⁹⁾

そして蓮蔵寺がある館山市水岡には七カ所ものやぐら群があり、蓮蔵寺もそのやぐらの入り口に位置する仏堂⁽⁴⁰⁾なのである。蓮蔵寺裏やぐらには五輪塔や宝篋印塔があり、また、構造上から鎌倉のやぐらの忠実な模倣タイプであるとい⁽⁴¹⁾う。また、蓮蔵寺やぐら群に隣接する水岡やぐら群には南北朝時代とされる十七基の浮彫五輪塔があり、さらに近接するやぐらのひとつである千手院やぐら群の前には石造地藏菩薩坐像がある。その背面には

文和二年癸巳卯月三日

との刻銘があり、文和二年（一二三三）の制作年が判明する貴重な作例⁽⁴²⁾だが、蓮蔵寺蔵釈迦如来像の三年前に造立されたものである。作風に関しては木造と石造という点を考慮しても決して近いものではないが、地理的条件と制作年の近似との二点は注目してもよからう。すなわちこの時期



图①⑥ 釈迦如来坐像 正面



图①⑤ 聖觀音菩薩坐像 正面



图①⑧ 釈迦如来坐像 側面



图①⑦ 聖觀音菩薩坐像 側面



图②0 釈迦如来坐像 背面



图①9 聖観音菩薩坐像 背面



图②② 釈迦如来坐像 像底



图②① 聖観音菩薩坐像 像底

に集中して造仏ややぐら造営が行われたのである。

この水岡安東は、出自は不明ながら開発領主である安東氏の所領で、後の応永三十年（一四二三）には鎌倉極楽寺宝塔院領となったものらしい。⁽⁴³⁾ 極楽寺が律宗寺院であることは周知のように、また、称名寺と深い関係にある寺院が安房には多いことも注目される。清澄寺や下尺万真福寺に⁽⁴⁴⁾ 関係する聖教類が金沢文庫には多く残されており、小網寺には「金沢 審海」と称名寺開山審海の刻銘がある密教法具一揃も伝来する。⁽⁴⁵⁾ また、鎌倉との関係を示す作例として、弘安九年（一二八六）鑄造の梵鐘があるが、物部国光の作で、国光の作は称名寺をはじめ、海老名・国分寺尼寺、鎌倉・円覚寺、横浜・東漸寺にも伝わっている。

水岡のやぐらは南北朝時代の造営で、この蓮蔵寺蔵の木造釈迦如来も延文二年の造立であるので、やぐら寺院の本尊として造立された可能性も考えられる。となればその造像目的も追善供養など葬祭にまつわる釈迦像造立と想定できまいか。現在、曹洞宗の蓮蔵寺であるが、もとより曹洞宗ではない。すなわちここで想像されるのは後に所領となる極楽寺や称名寺との関係であり、律宗との関係であろう。

鎌倉のやぐらの造営については律宗の関係が考えられて

おり。建築土木集団の統率という点で律僧とその技術との関連が指摘され、また、寺院址にともなうやぐらが多く、しかも律宗系の寺院が大部分を占めている。⁽⁴⁶⁾ 安房には直接的に律宗系寺院は見あたらないが、⁽⁴⁷⁾ 先述のように称名寺や極楽寺との深い関係を示す資料が多く残されている。彫像に関しても清水真澄氏によれば館山市における鎌倉、南北朝時代の作例は鎌倉文化圏の影響を考慮しなければならな⁽⁴⁸⁾ いとされ、鎌倉時代の作例では相賀地蔵堂の地蔵菩薩像や南北朝時代では源慶院の法衣垂下の形式をみせる地蔵菩薩像などがその具体例であるという。

西大寺流は叡尊にはじまり、西大寺長老第二世信空とつづいてその末寺を増やしている。

明徳二年（一三九一）の『西大寺諸国末寺帳』⁽⁴⁹⁾ によって関東の西大寺末寺をみると「常陸国 平福寺」「下総国 雲富大慈恩寺」「下野国 小山真福寺」「相模国 極楽寺四室」と、わずかに四ヶ寺しかない。ところが末寺ではなく⁽⁵⁰⁾ とも、武蔵の称名寺や常陸の三村寺、穴塚般若寺など、西大寺流の寺院として知られている。それは極楽寺の末寺となっている場合も少なくない。『西大寺諸国末寺帳』には極楽寺のあとに「参河国以東諸末寺／多分属極楽寺」とあ

り、三河国より東には極楽寺の末寺が多いという。また、称名寺にしても西大寺の末寺ではないが、律僧の活動は周知のとおりであり、称名寺末も多い。また、現在のように宗派意識がどの程度明確であったのか明かではなく、律僧や念仏僧、禪僧などがそれぞれ交流をもちながら共存しており、称名寺にしても西大寺流の律だけでなく、法華経や禪などの兼学寺院である。

源昌の聖観音像が蓮実舍利容器や小袈裟、錦裂などをはじめとして西大寺流にみられる納入品の特徴をそなえ、蓮蔵寺釈迦像がやぐらにおける葬送や追善供養のための造立であることは、この二作例が関東における南北朝時代の律宗関係の造像として考えられまいか。

おわりに

聖観音像及び像内納入品の特色についてみてきた。東国の西大寺流の作例では清凉寺式釈迦如来像がしばしば指摘されていたが、それ以外にも西大寺流の特徴を示す像がこの聖観音像であることがその納入品から判じられた。

さて、源昌が西大寺叡尊のもとで主に活躍したと思われる

る善円（慶）・善春のように律宗の僧侶のもとで活動していたかについては作例二例だけでは判じることができない。また、聖観音像の伝来寺院が不明で、館山の蓮蔵寺釈迦という二作例だけで、源昌の活動を想定することもできない。もとより、源昌の仏師としての系譜も不明である。だが、律僧の関係しそうなやぐら本堂としての釈迦如来像造立や本稿で取り上げている聖観音像の納入品の特色を考えれば律宗との関係が深い造立となると、壇越としての律僧の存在は想定してみたくなる。

清凉寺式釈迦像のような際立った形式の特徴や文殊菩薩像や聖徳太子像のように特定の尊像でなくとも、西大寺流の造像は行われていたのだろう。おそらく地蔵菩薩像なども西大寺流のもとで造像されていたものと思われる。それは真言とか、律とかいった教義的な面ではない追善や逆修といった習俗的な点での造像が考えられる。

今後、源昌の作例がひとつでも多く見いだされることを願って本稿を終えたい。

註

(1) そのまとめとしては山本勉「南北朝・室町時代の彫刻」

(日本美術全集題11卷『禅宗寺院と庭園』所収、講談社、一九九三年六月)を参照。

- (2) 田辺三郎助「大仏師康俊・康成について」(『大仏師康俊・康成にの研究―千手寺千手観音立像修理報告書―』光堂千手寺編一九九七年六月)

- (3) 清水善三「鎌倉時代以降における彫刻の衰微について―日本彫刻の可能性と限界―」(『佛教藝術』二四二号、二四四号、二四五号、一九九八年十一月、一九九九年五月、七月)

- (4) 清水真澄「東国における院派仏師の動向」(『中世彫刻史の研究』所収、有隣堂、一九八八年三月)及び同氏「仏師院広とその作例」(『国華』九七三号、一九七四年九月、後に「仏師院吉、院広の事蹟とその作例―十四世紀における院派の動向をめぐって―」と改稿し『同書』所収)、「院派仏師事蹟年表」(『国華』一〇〇一号、一九七七年六月、後に改稿し『同書』所収)など。

- (5) 北口英雄「興源寺薬師如来像について―南北朝期における宇都宮一族の造像―」(『鹿沼史林』十四号、一九七五年一月)

- (6) 清水真澄・林宏一・山田泰弘「宋風彫刻再考―法衣垂下像と半跏像について―」(上)(中)(下)(『佛教藝術』一二二号、一二三号、一二六号、一九七八年十二月、一九七九年三月、九月)

- (7) 若林繁「会津田島薬師寺の木造阿弥陀如来坐像」(『ミュー

ジウム』四一三三号号、一九八五年八月)、同氏「宋風彫刻の末流―福島 of 法衣垂下像―」(『福島考古』三十六号、一九九五年三月)

- (8) その他、南北朝時代の作例のなかで乗円に関しては早く注目されており、

佐藤昭夫「大仏師乗円とその造像について」(『金沢文庫研究』一三四号、一九六七年四月)

上原昭一「十四世紀仏像彫刻の展開と仏師乗円」(『佛教芸術』八十五号、一九七二年四月)

などがある。ついで、院派に関する論考として

田中恵「十四世紀院派仏師の造仏と林下禅―千葉円照寺釈迦三尊像と東光寺院廣銘僧形坐像を中心に―」(『ミュージアム』四六九号、一九九〇年四月)

円派に関する論考として、

岩田茂樹「米原・青岸寺の堯尊作聖観音坐像について―南北朝時代の円派仏師の一系譜―」(木村至宏編『近江の歴史と文化』所収、思文閣出版、一九九五年十一月)がある。

- (9) 筆者は平安時代から鎌倉時代にかけてみられる印仏の一特徴についてまとめたことがあるが(内田啓一「短冊型に印捺される印仏について」、『町田市立国際版画美術館紀要』第三号、一九九九年三月)、南北朝時代における印仏の種々相に

については別の機会に論じてみたいと思っていた。本印仏は像容が簡略になりつつあるこの時期の印仏のなかで、後述するように像容もしつかりしており、貴重な作例であることは言をまたない。

- (10) 前垂れは鎌倉時代に流行した袖が長く垂れる法衣垂下形式の彫刻にみられはじめる。薄井和男氏のご教示によると、十三世紀中頃より行われた鎌倉地方様式の流れを汲みながら、十四世紀中頃には鎌倉地方では制作されず、それ以外の地方で見られるようになった様式であるという。この袖を短くすると、本像のような形式となり、これも宋風の和様化であるうか。いやむしろ土着化と言うべきかもしれない。

- (11) 静岡・願成就院藏不動明王三尊像及び毘沙門天像像内納入品の五輪塔形銘札には

文治二年^{鎌倉時代}丙午五月三日奉始之^{巧師内当道運慶}執筆南無観音とあり、運慶に「巧師」の呼称が用いられている。しかし、この場合、運慶の自筆ではなく、南無観音なるものの執筆であり、運慶に対する敬称とも考えられる。したがって、自称としての「巧師」は他に類例が見あたらないが、音の点で留意しておきたい。

- (12) 清水真澄「中世仏師の肩書」(『中世彫刻史の研究』所収、有隣堂、一九八八年三月) 清水氏によると仏師の肩書に「講師」を用いた例は多い。源昌にみる「工師」も音からすれば、

この字が当てはまことになるが、「仏師講師」と仏師の下に用いられて称している例が多く、源昌の場合の「工師」はやはり「巧師」もしくは「巧匠」などの意味に近いものだろう。

- (13) 仏師が用いた官職は式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内の七つで、中務を除く八省の内七省が用いられているという。前掲注4清水論文「中世仏師の肩書き」参照。

- (14) 「福島県立博物館、一九九七年六月」参照。

- (15) 「市原市内仏像彫刻所在調査報告書―北部編―」(市原市教育委員会一九九二年三月)

- (16) 「源」の字がつく仏師に南都宿院仏師で、俗人仏師とされる源次・源四郎がいるが、十六世紀の活躍で年代的に離れており、ここでは考慮しない。宿院仏師については、皆川祥子「宿院仏師について」(『佛教藝術』一二九号、一九八〇年三月) 及び鈴木喜博「仙算と実清―宿院仏師研究の視点から―」(『東大寺諸尊像の修理』東大寺教学部編、毎日新聞社、一九九四年九月) を参考とした。

- (17) 南北朝時代の関東において制作された彫刻と像内納入品について具体的に論じた論考に

副島弘道「真岡市莊嚴寺不動明王像と納入品」及び本谷麻子「像内納入品にみる信仰の諸相―主に莊嚴寺不動明王像像内納入印仏を通して―」(いずれも『宗教・民衆・伝統

―社会の歴史的構造と変容―』所収、地方史研究協議会編、雄山閣出版、一九九五年九月）

落合則子「不動明王坐像」（『仏教史学研究』三三―二号、一九八九年七月）

などがあり、いずれも納入品から造立背景の解明が試みられている。その他、『日野市史料集高幡不動胎内文書編』（日野市編さん委員会、一九九三年三月）でも納入文書が懇切に解説されている。

(18) 舍利納入について田辺三郎助氏は「そもそも仏像における舍利の納入は形而下の彫像に形而上の魂を籠める意味合いといつてよいだろう。」（『像内納入品Ⅱ』『重要文化財別巻Ⅱ像内納入品』毎日新聞社、一九七八年一月）とし、奥健夫氏は「単なる物質でしかない彫塑像に魂を吹き込み…中略…いわば魂をもった仏像（瑞像）となることが期待された」（『清涼寺・寂光院の地藏菩薩像と「五境の良薬」―像内納入品論のために―』『佛教藝術』一三四号、一九九七年九月）としている。像をホトケとする最も重要な納入品が舍利といえるだろう。

(19) 倉田文作『像内納入品』（日本の美術八十六号、至文堂、一九七三年七月）また、文殊菩薩騎獅像納入品には蓮実型舍利容器とは別に舍利が納入された水晶五輪塔と外筒として金銅製筒形容器がある。倉田氏によると、水晶五輪塔もやはり

錦袋に包まれて外筒に納められていた。この舍利容器が文殊菩薩騎獅像本体の舍利と思われる。また、蓮実型には「尼連生」との墨書がある紙片が付随している。となると、蓮実型舍利容器は本来の舍利容器とは別に尼連生に関わる何か別の意図をもったものと考えなければならないが、現時点では不明と言わざるを得ない。

(20) なお、叡尊と仏舍利納入については般若寺丈六文殊菩薩騎獅像を造立するにあたって、『感身学正記』（『西大寺叡尊伝記集成』奈良国立文化財研究所編、法蔵館、一九七七年十月）によると文永四年（一二六七）四月十日には納入するための大般若経を転読し、次いで同月二十日には

構四角三重之厨子、上層奉納仏舍利、并一字三礼妙法蓮華經一部、同開結、阿弥陀經、般若心經各一卷、同一字三礼勝王經一部十卷、梵字心經一千卷、…中略…下二層奉大般若經一部六百卷…

とあり、三重の厨子をしつらえて、上層に法華經や開結二經、般若心經などとともに仏舍利を納め、下二層には大般若経を納めている。この前後については内田啓一「西大寺叡尊とその周辺」（『大和路の仏教版画』町田市立国際版画美術館編、東京美術、一九九四年二月）参照。

(21) 例えば

奈良・伝香寺蔵木造地藏菩薩立像像内納入品 薬師如来坐

像・十一面観音菩薩立像

愛知・赤岩寺蔵木造愛染明王坐像像内納入品 愛染明王坐像（多数作善）

京都・浄瑠璃寺蔵木造馬頭観音菩薩立像像内納入品 馬頭

観音立像（多数作善）

奈良・西大寺蔵文殊菩薩騎獅像像内納入品 文殊菩薩立像

ハーヴァード大学サックラー美術館蔵南無仏太子像像内納入品

入品 観音菩薩立像・釈迦如来立像・愛染明王像など

広島・西福寺蔵聖観音菩薩立像像内納入品 千手観音菩薩立

像・不動明王立像

など、同時期の作例では木彫仏がほとんどである。小金銅仏が納入された事例ではケルン東洋美術館蔵地藏菩薩立像像内納入品の釈迦・阿弥陀遣迎二尊の例がある。ケルン東洋美術館像については前掲奥氏論文注18参照。

- (22) 鈴木喜博「広陵町の仏像―古代・中世を中心に―」（『広陵町の仏像』広陵町教育委員会、一九九二年三月）及び前掲注20『大和路の仏教版画』参照。

- (23) 岩座に半跏して片足を垂らすそのポーズは大將軍神像と同じである。しかし、大將軍神像の多くは右手に剣であつても左手は刀印である像が多い。大將軍神像については、中野玄三「大將軍信仰とその造形」（『佛教藝術』二一九号、一九九五年三月）参照。

- (24) また、手を額にかざして遠方を見るポーズの像に十二神將の戌神像がある。しかし、これとて坐像はほとんど見あたらず、また、単独での印仏も考えにくい。

- (25) 法金剛院蔵木造十一面観音菩薩坐像像内納入品「結縁交名」十一面観世音菩薩結縁衆交名帳

僧憲海 僧俊海 僧寛圓／証玄大徳 真性大徳 尋等大

徳／道憲大徳 是性大徳 比丘任尊／比丘覺鑒 比丘道

□圓証大徳／忍性大徳 信空大徳 尼浄阿／……

とあり、大徳の尊称を多数みることができる。

- (26) その他、伝記である『性公大徳譜』や凝然大徳などの尊称が各書で用いられている。禅宗でも高僧に対して「大徳」が用いられているが、ここでは像内納入品の特色を考えても律僧だろう。

- (27) 八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」（『佛教藝術』一九九号、特集叡尊と西大寺派美術、一九九一年十一月）

- (28) 前掲落合論文注17及び『大和路の仏教版画』前掲注20参照。

- (29) 奥氏前掲論文注18では、清凉寺・寂光院の両地藏菩薩像の像内納入品の特色について『往生要集』卷上、大文第二・欣求浄土第四、五妙境の樂の項に合致することを明らかにされているが、ここで注目すべき納入品に扇があり、その解釈として、

自然の徳風は温冷調適し、衆生の身に触るるに、皆快樂

を得ること、譬えば比丘の、滅尽三昧を得るがごとしとの文言を示し、扇の徳風が色・声・香・味・触の五境の「触」に相当するものと考えられている。

- (30) 愛媛・保国寺蔵仏通禅師像の納入品については現在同寺に桐箱に納められ別置されている。重要文化財指定についてはもとより本体像の納入品であるか確証がないということから指定は見送られている。筆者はかつて印仏摺仏調査団（団長田辺三郎助）の活動の中で調査したことがある。追納の可能性がある納入品の問題も含めてやはり確証はもてなかったが、納入品と考えてほぼ間違いのないと思われた。したがって、この表に掲げた次第である。また、東福寺の大明国師像にみられる西大寺本と同版の九重守がある納入品例やこの保国寺仏通禅師像にみられる伝香寺本と同版の宋版法華経などをはじめとした納入例などを鑑みると西大寺流律と同様な納入例であることは注目される。東福寺の禅僧の肖像彫刻は寿像ではなく、没後制作の像であり、顕彰や追慕、追善供養の造立目的がある。ここで西大寺流と東福寺の関連を考える必要があるように思われる。今後の課題としておきたい。

- (31) 松本彩「西大寺の中世染織遺品について」『佛教芸術』一九九号、特集叡尊と西大寺派美術、一九九一年十一月）ここで、西大寺の諸像納入品にみられる錦には南宋との関係が想定されるという。

- (32) 西大寺蔵文殊菩薩騎獅像及び東福寺蔵大明国師像の像内納入品で同版と考えられる九重守について筆者は以前考察を試みたことがあるが（内田啓一「諸尊図像・陀羅尼等（九重守）について―西大寺本を中心として―」（『金沢文庫研究』三〇五号、二〇〇〇年十月）、九重守りを泰山府君（星）を中心とした冥府供養の効用がある卷子と想定した。

- (33) 「館山市の仏像―館山市内仏像彫刻悉皆調査報告書―」（清水真澄氏解説、館山市立博物館、一九八七年七月）

- (34) 像内背面内刎に木札が打ち付けられており、それには「明治四十年旧十二月下旬／本尊彩色厨子新調／大佛師／安房郡千歳村白子／石井一良」との修理墨書がある。すなわち、明治四十年（一九〇七）に千歳村白子の石井一良という大仏師が修理したことが解る。現状の彩色もこの時のものであるう。

- (35) 前掲注33「館山市の仏像」

- (36) 薄井和男氏の御教示による。

- (37) 鎌倉のやぐらについては赤星直忠「中世考古学の研究」（有隣堂、一九八〇年十二月）を参考。

- (38) 房総半島のやぐらについては、

井上哲朗・宮瀧交二「房総半島の『やぐら』について」（『六浦文化研究』創刊号、一九八九年十月）及び井上哲朗「房総半島における『やぐら』の存在形態」（中世房総史研究会『中世房総の権力と社会』所収、高科書店、一九九一

年五月)

がやぐらの存在とその意義をまとめられた論考であり、

『千葉県やぐら分布調査報告書』(千葉県史料研究財団、一九九六年三月)

が詳細な報告書として知られる。

- (39) 律宗と水上交通については早くから指摘があり、瀬戸内海での活動と東京湾及び茨城県霞ヶ浦での活動が指摘されている。細川涼一「鎌倉仏教の勧進活動―律宗の勧進活動を中心に―」(『中世寺院の風景―中世民衆の生活と心性―』所収、新曜社、一九九七年四月)

- (40) 六浦のやぐらには寺院・仏堂があったと指摘されており、神奈川・上行寺東遺跡(浄願寺)のやぐらにも、無常堂・奥の院としての建築物があったという。この点については、倉多正胤・井上哲朗・宮瀧交二「横浜市金沢区六浦地域のやぐら群について―上行寺やぐら群を中心とした分布調査報告―」(『三浦古文化』四〇号、一九八六年月)及び細川涼一「中世寺院遺跡が語る都市の境界―『上行寺東遺跡』の歴史的価値」(『死と境界の中世史』所収、洋泉社、一九九七年六月)参照。
- (41) 杉江敬「4、安房南部地区」(前掲注38『千葉県やぐら分布調査報告書』所収)

- (42) 前掲注33『館山市の仏像』「銘文篇」
- (43) 前掲注38井上論文。

- (44) 小笠原長和「武州金沢称名寺と房総の諸寺」(『中世房総の政治と文化』所収、吉川弘文館、一九八五年十一月)

- (45) 小網寺に伝来する独鈷杵、五鈷杵、五鈷鈴、金剛盤、花瓶、羯磨、羯磨台、輪宝、四轂の鑄銅密教法具一括のうち、金剛盤、花瓶、羯磨台の底部には「金沢審海」との刻銘があり、横浜・称名寺の開祖・審海に関係したものであると考えられている(『房総の文化財』千葉県文化財保護協会編、学習研究社、一九八三年六月、参照)。称名寺は、関東において西大寺流の流れをくんだ真言律の中心寺院であり、これらのことから真言律と安房国は何らかの形で関係があったと考えてよからう。

- (46) 大三輪龍彦「鎌倉地方の『やぐら』発生に関する諸問題」(『物質文化』十一号、一九六八年四月)なお、北村稔氏は律宗と石造遺物との関係に疑問を持ち(『鎌倉の『やぐら』発生前に関する私見』『史跡と美術』五三二号、五三三号、一九八三年二月、三月)、田代郁夫氏は律宗以外にも禅宗のやぐらへの影響を示唆している(『鎌倉の『やぐら』―中世葬送・墓制史上における位置付け―)(帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集『中世社会と墳墓―考古学と中世史研究3―』所収、名著出版、一九九三年七月)。また、杉江敬氏は館山のやぐらについては宗派を越えてのやぐら造営を考えている(前掲注38『千葉県やぐら分布調査報告書』所収「鎌

倉・三浦半島のやぐらと房総のやぐら」。単純に「やぐら」の造営とその背後に律宗を考えるわけにもいかないが、こと葬祭という点を考えると律宗の影響は考えざるをえない。

- (47) 西大寺藏木造観尊像の像内納入品に「授菩薩戒弟子交名」があり、そのなかの「授菩薩戒弟子、西大寺現在形同沙弥」の交名をみると、「源円二十八」「源海二十」とあり、安房国人に「源円」「源海」と「源」の字が付く沙弥が二人もいる。また、出身地をもって安房国に西大寺流を求めるのも早計であると思われるが、看過できまい。

- (48) 清水真澄「館山の彫刻」(前掲注33『館山市の仏像』所収)
(49) 松尾剛次「奈良西大寺末寺帳考―中世の末寺帳を中心に―」(『三浦古文化』五十一号、一九九二年十二月、後に『勧進と破戒の中世史』所収、吉川弘文館、一九九五年八月)

- (50) 穴塚般若寺の建治元年(一二七五)銘の梵鐘には

大日本国常州信大庄般若寺／建治元年_{亥乙} 八月廿七日己丑時正第二／大勧進源海／願以此功德 普及於一切／我等 与衆生 皆共成仏道／大工 丹治久友／大工 千門 重延

であり、源海の名がみえる。

《本稿は二〇〇〇年六月十日に開催された第5回昭和女子大学文化史学会にて口頭発表を行った内容に、新たな知見を加えたものである。本稿をなすにあたり、かうな屋主人佐々木明治氏からは

格段の御高配を賜った。また、神奈川県立歴史博物館・薄井和男氏、館山市立博物館・岡田晃司氏には御指導・御協力賜った。蓮蔵寺調査にあたっては紫雲寺御住職長原文雄氏そして蓮蔵寺檀家の方にもお時間も頂戴した。ここに記して厚く御礼申し上げます。》